
表の裏は裏の表

竜太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

表の裏は裏の表

【Nコード】

N6825H

【作者名】

竜太郎

【あらすじ】

時間軸の中で歪んでしまった世界。ほんの一瞬であなたは被害者となり凄惨な死を迎えるかもしれない。あるいは被害者を間抜けだと笑っているのかもしれない。ほんの僅かな違いで全てが異なる

第一話

「私じゃなくて良かったわね」

女はそういった。

409号室は深紅のベツトカバーだった。

女は携帯の画面を覗き込み目を丸くして男の顔に近づけた。

「ねえねえ、昨日の夜セントラルパークで殺人事件があったそうよ」
女は裸のまま紅いシーツを体に巻きつけている。

男はめんどくさそうに携帯の画面を一瞥して、女に気づかれないように身体をずらしてから顔をしかめた。

「怖いよね、私達、昨日セントラルパークで待ち合わせしたのよ」
男は女に背を向け「ごめん」といった。自分の我儘だと分かっているながらも会話に乗り気でない雰囲気を感じ取らない女に嫌気がさした。

夢の中でも欲情していた男は、幸せな顔で眠っている女のパンティのなかをまさぐり、男の性を発射したところだった。女の意識は夢うつつでもパンティのなかに指を滑り込ませると「んっ」と顎を突き上げるように鼻にかけた声を発した。

「ねってば。あなたは怖くないの？」

射精した後の倦怠感が身体に広がり眠気が襲う。

「あー怖いね」

そういつて目を閉じた。今度は顔の表情を確認させるように真上を向いた。

女はふてくされた顔をして男を睨み鼻に皺を寄せてから携帯の画面に向き直った。男はそれを気配で感じ取り、夢の中に落ちていった。男の耳に女の声は届かなくなった。

409号室の紅いベットは流れ出す血液のように赤く燃えていた。

待ち合わせは名古屋テレビ塔のあるセントラルパークだった。

バイトが終わった午後10時。地下鉄に向う人の流れに逆らう坂崎の足取りは軽やかだった。今夜は近藤町子と約束を取り付けてある。坂崎はポケットの中に手を突っ込んで、そこに在る箱を確かめた。町子への20回目の誕生日プレゼントはプラチナの指輪だ。

『受け取ってくれるかな』

溜息を吐くまねをしてみる。出てきたのはにやけた笑いだった。

携帯を取り出し時間を確認する。待ち合わせの時間まであと15分だ。待ち受け画面にはフレームに収めるために頬がすれそうになるほど近づいた二人が笑っている。

『可愛い。ほんとに可愛いよ』

就寝前の布団の中で携帯に話しかけるのが習慣となっている。

時間を確認する振りをして一日に何回携帯を開くか分からない。待ち受け画面を見るといつも町子が笑っている。その笑顔に計算は感じられない。素の素の素で幸せを振りまいている。

『町子、俺のことが好きなのか？』

坂崎は携帯に向かって話しかけた。二人のときの彼女の仕草、スツと近づく距離10センチ未満、

おはよう、の後に今日も頑張ろうね、と続くメール、お休みの後には意味深なハートマークが必ず2個並ぶ。

『俺は好かれている』

相思相愛!!!

それは叫びだしたくなるほどに甘美な言葉だ。

反対方向に歩くサラリーマンと肩がぶつかった。

「ごめんなさい」

坂崎はすぐに謝った。

『今日の俺は最高に幸せなんだ。世の中のみんなも幸せかい？』
猫背に丸まった鼠色のスーツの背中に投げキッスを送った。

シヨウウィンドーを鏡代わりにして頭髮をセットしなおす。短パンに、クロツクスのサンダル、ユニクロのＴシャツ。

もう少し大人路線で行けばよかったか？

ガラスに映る自分の姿はどこにでもいそうな若者だ。軽そうだ。舌打ちをして首をひねった。

祖父母と同居する町子は、両親をちゃんとお父さん、お母さんと呼ぶ。彼女は家族を大切にする。

「家のクソババーがさ、大学に入ったからって遊んでばかりいるなって怒るんだよ」

大学ではクソババーが標準語だった。新学期のゼミで自己紹介を兼ねた飲み会の最中だった。

「お母さんと呼ばなきゃだめ。誰に育ててもらったと思っているの。感謝できない人間は最低よ」

間髪いれずに投げつけるように町子が厳しい言葉を吐いた。見えな
い地雷を踏んづけたようになにがおこったのかわからなかった。そ
の場の空気が一瞬にして張り詰めるほどの厳しさだ。

クソババーと言った本人が「一本採られましたね。えへへへ」と卑
た笑いを見せるまで誰もが口を開けたまま固まってしまった。

それが町子に心の根っこを掴まれる始まりだった。

「おかしなやつ」

初めはそんな印象だった。しかし気になりだすとその姿を目が追っ
てしまう。目が追い出すと心が傾き始める。

心が傾き始めると好きだと認識するまでに、さほどの時間は掛から
なかった。

町子は完全に変わり者だった。良く笑い、良く泣き、とても面倒見

が良かった。

同級生の女子からは「お姉ちゃん」と呼ばれている事を発見した。町子が現れるとその場の空気がパツと明るくなることも、ひどく偏屈で、頑固者でマックよりもロツテが好きなのも知った。ロツテには「マックには無い優しさがある」そうだ。

こうと決めたらそれでも動かず、教授に喧嘩口上をたれることもあった。金髪に、蒼いコンタクト、まつ毛は、付け毛でばっさりと盛り上がっている。肩にはハートとどくろを組み合わせたタトゥーが入っている。いわゆる、「最近の若者は・・・」と年寄り連中の槍玉に上がりそうなギャルだ。

そのギャルが「お父さんお母さんを大切にしなさい。時間は必ず守りなさい。すぐにお股を開いちゃだめ。」そういつて説法を始めるのだ。尻が軽そうで実は身持ちが硬い。そのアンバランスさがたまらない。

「それが好きなんだよ」

歌いだしたい気分だ。服装はどうしようもない。気分を取り直してスキップをした。

テレビ塔の下、ベンチに腰掛け何度か足を組みなおし煙草を一本吸った。町のネオンは異常に明るい。樹木がブラインドになってセントラルパークは程よく薄暗い。人目をしのぶカップルがどこからともなく集まってくる。

「ベンチでやつちやたよ。」

講義の最中隣に座った女の子同士が声を潜めて話していた。

「あそこは暗いから大丈夫だよね」

彼女達はここがのぞきのメッカだと言うことを知らない。

11時5分前。もう一時間もすると終電はなくなる。ということは・・・

『町子もそれを望んでいるに違いない。それを。』

坂崎は一人で頷いた。妄想が頭の中をぐるぐると渦を巻いた。身体の線は細いくせに町子は胸がでかい。Cカップ、いやDはあるかも

しれない。きっとピンクだ。ピンクに違いない。マシユマロのように柔らかくって。

「おまたせ」

妄想に取り付かれて走ってくる町子に気が付かなかった。

「またせちゃった？」

「いや、全然」

思わず立ち上がり股間の前で手を組み頬を引き締める。暗闇でも町子の胸は存在感がある。

『俺は胸が目当てじゃない』

心の中頭を振った。そんなふしだらな、不純な気持ちで好きになっただんじやない。

ポケットに手をつ突っ込んだ。そこには10万円の指輪が在る。丸々一か月分のバイト代。それが俺の誠意だ。

「ちよつと話そうか」

ベンチに腰を下ろす。隣に町子が座った。

『さあ、告白だ』

町子の誕生日、サプライズな告白。今日という日を除いて告白のタイミングはありえない。今日が最良の日だ。

覚悟を決めて息をはいた。

「町子さん、ずっと好きでした。僕と付き合ってください」
緊張から必要以上に声帯が振るえ半ば叫び声に近くなった。

『100万年離れた星の光りより・・・』

散々悩んで考えてきた台詞はどこかに吹っ飛んでしまった。眼をつむって指輪を差し出した。彼女の表情は分からない。心苦しい、間、が期待と不安を煽り手が震える。

「こちらこそお願いします」

暖かな温もりと共に手のひらが重なった。

「いやったー」

坂崎は思わず飛び跳ねた。

「おめでとー」

どこからともなく声が飛んできた。

街頭に照らされた木陰で男と女が抱きついていて見渡せば10メートルほど離れたベンチにも男女が座っていた。自分の事で頭が一杯でそこそこにいる周りの人まで気が付かなかった。きつと告白したのがみんなにばれている。

「やったね」

鼻にかけるような舌つたらずな声が出た。街頭の下にも男女がいた。夜の闇に溶け込みそうな黒いスーツ姿の男に、ミニスカートの女。暗がりの中でも堅気じゃない雰囲気醸し出している。水商売系の女とやくざな男。水商売系の女が手を振っている。

恥ずかしくて逃げ出したい気分だ。それでも世界中が自分と町子を祝福してくれているんだと思うと笑みがこぼれる。「やりました」坂崎はガッツポーズで返事をした。

「行くう」

坂崎は町子の手を握って走り出した。世界は自分を中心に回っている。行動を起こせばなんだって手に入る。疑う余地がなく未来が明るいことを信じる事ができた。

必死に走って笑いながら樹の陰でキスをした。

熱いほどの温もりに締め付けられる想いだった。

町子の唇は壊れてしまいそうなほど柔らかかった。

笑いながらキスをして歯と歯が当たった。

少し戸惑って俯き恥らう仕草を見せる町子。

そして顔が上がってくる。瞳が会つとまた笑った。

目の前にある彼女の瞳にどうしようもない欲望が身体を駆け巡った。

この女は自分だけが守る。俺だけのものだ。

キスだけじゃ足りなかった。

彼女の手を引いた。ファッションホテルはすぐそばにある。

ファッションホテルと町子の顔を交互に見る。そして町子の顔を真剣に見つめ頷いた。

コンドームはもっている。まずはキスをしてやさしく全身を愛撫して、それから胸をやさしく包むようにして揉む。手を洗って性器には細心の注意を払うこと。エロ雑誌から得た知識を反芻する。原色に光るネオンをくぐりチエックインをする。

部屋番号は409号室。手が震えて鍵が刺さらない。それを町子に悟られないように身体の影にして両手で鍵を差込んだ。

『ガチャリ』

と、硬質な音が部屋の中に響く。有線が無人の部屋に流れていた。丸いベットは深紅のシートだ。

ドーン！！

頭の中が破裂した。後ろについてくる町子と身体を入れ替え、覆いかぶさるようにベットに押し倒した。

「ちよつと」

町子が抵抗する。頭の中には理性は存在しなかった。

目の前に町子という身体がある。それが今の全てだった。

鼓動が早まり鼻息で蒸れ上がる熱を放出した。キスをせがむ。町子の顔が、右左に揺れて逃げ出そうとする。

洋服をたくし上げる。ピンクのブラジャーの花柄が嫌にエロチックだった。洋服の中から媚薬のような香りが漂ってくる。汗臭さではない女臭さだ。町子の手が『いやいや』をするように胸元に組まれる。構いはしなかった。無理やりにその腕をどかしブラジャー越しに乳房を鷲掴みにした。セックスの手順は鼻息と一緒に消えてなくなっていた。むしろぶりつくように胸に顔をうずめる。やわらか・・。

『パシーン』

見事な音が部屋にこだました。突然襲った激しい刺激が急激に膨らんだ風船をしぼませた。

「こんなしかた嫌よ」

ベットの上で組み敷かれた町子は涙目だった。坂崎は急速に芽生える現代人としての理性の前に恥ずかしさで一杯になった。睨み上げ

るような町子の視線が追い討ちをかける。

ふらふらと立ち上がり椅子に腰掛けた。

「ごめん」

町子は何も答えなかった。気まずい雰囲気か部屋中を息苦しくする。やけに明るい有線の楽曲がうつとうしいほどの音量で流れている。

町子はベットの上で横たわったまま動かない。

『もうだめなのかもしれない』

ついさつき始まったばかりでもう終わりだ。バカらしくなるほどにあつけない。なんて俺はバカなんだ。間違いなく嫌われた。

「怖いよ。坂崎君」

町子の口から出た言葉が何のクッションも無いままに胸に刺さる。

「まず、電気を消して。恥ずかしすぎる」

坂崎は町子の意を汲み取れずに呆然としたままだった。墮ち幅がひどすぎてそこから這い上がる鳶が垂れ下がってきたことに気が付かなかった。

頭の中で言葉に意味が宿ると死んだ魚が生き返るように坂崎は椅子から飛び跳ねた。

「わかった」

走っていつて電気を消した。

「叩いてゴメンネ」

町子が唇を寄せてきた。

朝まで眠ることができなかった。寝てしまつのがもつたいなくて仕方がない。今、腕の中に町子がいる。見下ろす胸元は半開きになり谷間を露にしている。その乳房をつついてみる。

「どうしたのよ、エッチ」

手と手が重なり合う。二人だけの空間。二人だけの吐息。少なくとも今この瞬間は二人のためにある。外を走る車の音も、有線の曲も、ベットの上の衣擦れの音も、空気だって、隣の部屋から聞こえるトイレの水洗の音だって全てがいとおしく思うことができる。全ては

二人を引き立てる飾りで、二人を祝福するために存在するのだ

「好きだよ町子」

「私も」

幸せ過ぎると溜息が出たことを坂崎ははじめて知った。

有線から音楽が止まった。「ニュースの時間です」と言うアナウンスが聞こえた。

「有線でニュースなんか流れたっけ？」

坂崎は頭をひねった。かつぜつの良いアナウンサーの声が不意に現れた野良犬の鳴き声の様に聞こえた。二人の間に纏った濃密な空気の密度が見る見る薄れていくようだった。アナウンサーはどこかの選挙結果を報道している。ベットサイドに並んだいくつかのボタンを押してみる。有線は止まる気配がない。

「ちよつと待つて」

町子が不意に天井を指差した。ニュースに意識をとられた。

「本日未明、名古屋市セントラルパーク内で男性と女性の死体が発見されました。目撃者の証言によると殺害された男性は突如現れた少年ギャングに集団で暴行を受け死亡。女性は乱暴された形跡があるそうです。男性は30歳前後で、女性は近くのクラブのママ、百合奈さんであることが分かっています」

ニュースは終わった。ラテンミュージックが流れ始めた。

坂崎の頭の中ではギャングに殴り殺され、大量な血を流す男性の遺体が回った。『乱暴を受けた形跡』という言葉が胃を締め付けるような後味の悪さを残した。

「セントラルパークっていったよな」

「セントラルパークっていった」

「俺達さつきそこにいたよな」

「うん。そこにいた」

薄気味の悪い事件はそこらじゅうにありふれている。大抵は対岸の

火事で片付けることができる。大抵の枠組みに収まらない事件は極稀だ。

自身の災難か、周りの人間の災難。今回はどちらでもない。ということは、やはり大抵の中でうずもれていく事件だ。

殺人事件があつた同じ位の時間に、同じ位の場所にいた。ただそれだけのことだ。

「気持ちが悪いな」

町子が言った。

クラブのママという言葉にミニスカートを着た女を思い出した。セントラルパークの街頭の下。やくざな雰囲気を纏った男と怠惰な水商売系の女。

「やったね」

舌つ足らずな女の声。

まさかな・・・

「まあ、俺達じゃなくて良かったよ」

坂崎はつぶやいた。

男は一人で歩いていた。灰色のスーツで丸まって猫背で歩く男は闇に溶け込み影が薄い。営業一課から業務課という名前の倉庫係に任命されたのは先月だった。

仕事人間だった男は20年来営業一筋で会社に貢献してきた。会社側も男の成績にふさわしいポストを順次用意した。25歳で係長に昇格し、30才を目前に控えたある日、営業2課、課長の人事を拝命した。それは、20台の課長という社史に無かった人事だった。

「この度の人事身に余る光栄でございます。切磋琢磨しこれからも会社に貢献できる人材であるよう精進いたします」

男は営業本部長を務める上司にすぐに挨拶が上がった。直属の上司である本部長の強い推薦があつたことは想像に硬くない。

男は自信にあふれていた。まさに、自分が会社を背負って立つんだという気概に溢れ、同世代の出世頭であり、エリートコースをひた走っている自負があつた。

「軽い鬱症状ですね」

風邪をこじらせ内科に罹つたおりに医師に宣告された。全身の倦怠感が抜けず3日間ほど会社を休んだ。入社以来始めての私用による長期休暇だつた。

「うつ？、ですか？」

医師の言葉は頭の中で像を結ばなかつた。

鬱といえば精神病ではないか。俺は風邪を引いたんだ。そんな思いで医師を訝つた。

簡単な選択式の質問用紙を3枚ほど書かされた。

ひどい疲れを感じる事がありますか？

睡眠不足だと感じていますか？

肩は凝りますか？

仕事の能率が上がらないと悩む事がありますか？

騒音が気になりますか？

質問内容はどれもこれも幼稚な物ばかりだ。

疲れを感じるに決まつている。仕事は忙しい。毎日睡眠不足だ。肩が凝るのは昔からだし、騒音に集中を邪魔されるのは腹ただしい。

男は仕事を選ぶべきではない。仕事は俺を選ぶのだ。無理難題な任務をこなさなくてはならないときもある。当然他の仕事の能率は下がるだろう。

アンケートに正直に答えていくとほとんどの項目に該当した。

だからなんだというのだ。わずかな不安を持ち前の気の強さで押し返し医師の言葉を待った。

医師は丸い淵無しめがねを少し下げ男の顔を覗き込んだ。患者を診る目だ。

「該当項目が多ければ多いほど鬱病の可能性は高くなります。」
男は鼻で笑って立ち上がり、無遠慮な視線で医師を値踏みした。相手に伝わるように悪意を放ち背を向けた。

「2、3日しても気分が優れなかったら必ず医師の診断を受けてください」

男は医師の言葉を診察室の扉を閉めてさえぎった。

そんなはずは無い、馬鹿馬鹿しいほどの誤診だ。

男は診察料を払わずに病院を出た。看板につばを吐きかけてやりた
い気分だ。看板には内科、精神科とあった。

果たして、二日しても、三日しても気分は良くならなかった。いつまでも休んでいられるわけも無く、薬局の風邪薬を栄養ドリンクで飲み込み出した。栄養ドリンクと風邪薬。このコンビ二に何度助けられてきたか分からない。魔法のように身体の訴える不快感を取り除いてくれる。ここぞというときにはこいつらに頼ってきた。風邪を引いたときはこれに限るのだ。暗示が掛かったように飲み込むそばから力がわいてくるような錯覚を覚えていく。しかし。

午前中はまだ良かった。午後になるとだんだんと体調が悪くなり、それに伴い気分も塞ぎがちになった。些細な事でいらいらし、事務員を怒鳴り散らした。

「はさみがないだろう！」

そういつて事務の女の子を咎めた。はさみは在ったのだ。しかし、鉛筆やボールペンと一緒にペンたてに入っているはずが、机の上に無造作に置き去りになっていたのだ。

それが許せなかった。

給湯室から女子社員同士の悪口が聞こえてきた。

悪口の槍玉に拳がつているのは自分だろうと想像がついた。女子社員の口から、エリートという言葉がついて出ていたからだ。いつまでも電話で無駄話をしている部下に腹が立った。窓の外の車の流れ

に腹がたつた。

この会社の中で模範的な社会人として一日を過ごす者は自分以外にはいないと思つた。どいつもこいつもまじめには働いていない。

部下を監視していると部下と目が合った。上司を監視すると上司と目が合った。

そして気が付いた。

みんなが俺を観察している。袂が無かつたのは女子社員が俺の足を引つ張るためにやった嫌がらせかもしれない。袂が無かつたらどうするのか俺を試したのだ。

課長になつたのも俺を試すためなのかもしれない。

みんなが俺を試しているのかもしれない。

そんなことに今まで気が付かなかつたなんてなんて俺はバカなんだ。

「課長、外線3番です」

そういつた女子社員の顔は俺を見下しているように強気にみえた。

電話の相手は坂口が開拓した大口の取引先だつた。業績不振を理由に単価調整を以前から依頼され、返答の期限は過ぎていた。

「坂崎さん、いつになつたら返事をいただけませんか？」

相手は開口一番にそういつた。

(こいつは俺をおとしめようとしているのか?)

坂崎は受話器を耳から離しその中を覗き込むように見つめた。

一週間経過しても体調が回復する見込みは立たなかつた。顧客とのトラブルが頻発し、営業本部長が頭をさげる事態まで発展した。

「次期、営業部長は誰がふさわしいのかね？」

本部長室で睨まれた男は返す言葉が無かつた。何もかもが嫌になつてた。あれほど体中に満ち溢れていたエネルギーがどこにも無かつた。会社が好きだつた。仕事が好きだつた。それは過去形だつた。もともと俺には課長なんて無理だつたに違いない。

「もういい。出て行きたまえ」

本部長の言葉に背中を押されるように辞退した。事務員と視線が合った。ずっとその視線は下げられた。部下の営業課員がこちらを見ている。どの顔を見ても視線は合わなかった。意図的にこちらを無視している。

（俺は誰からも必要とされていない）

はつきりと男には理解できた。

社史始まって以来の昇格人事、20台の課長、エリート、出世頭、背負い込んでいた言葉が滑り落ちていった。

全ては最初から存在していなかったに違いない。翌週から男は出社する事ができなくなった。

家族の勧めで精神科を受診すると医師ははつきりと鬱病だといった。3週間の入院。

「気持ちを落ち着かせて、まずは体力を回復しましょう」
医師はそういった。

うつ病を克服するにはまずは寝る事が大切だ。仕事を忘れ、一切の心配事を忘れてしまふのがいい。その次に自分が鬱である事を認識し、どうしても鬱に陥ったのかを明確にする。そして精神の安定と投薬によって枯渴したパワーを徐々に取り戻していく。それが医師から受けた治療方針だった。

「なんて悠長なことを言っているんだ」

調子の良い時は医師の無能ぶりをののしった。大抵午後には医師の言うままにでくの坊のように従った。自分では何一つ重要な事柄を判断することができなかった。

週に3回、鬱の患者同士が集まるコミュニティーが開かれる。そこには鬱のベテランから男のような初心者、社会的地位を持った現役世代から、無職の老人までがいた。

男は早く病を治し会社に復帰しなくてはならなかった。会社には自分にしかできない仕事が山ほどあり、それを任せられるほどの人材はまだ育ってはいない。俺がいなくてはだめなのだ。早く直さな

くては。

男は焦っていた。

「それがよくないですよ」

医師はそういったがどうすることも出来なかった。

男は「早く出社したい」その一心でコミュニケーションにも積極的に参加した。

俺はエリートで会社をしょって立つ人材なのだ。その自覚が男を支えていた。

午前中はまだ良かった。しかし午後になると気分は塗りつぶされるように暗くなり、やらなくてはならないことが分からなくなった。

「それがまさしく鬱なんですよ。自分にしか出来ない仕事があり、自分がやらないとみんなに迷惑が掛かる。そう思っていますか？」

男の頭の中は黒く塗りつぶされていた。不安と、立ち上がることができない自分の不甲斐なさと、所詮はどこにも所属することなく、誰にも必要とされていない焦燥感が募り、頭の中はがんがんと何かが鳴り響き、誰かが自分を貶めようとしているかのように思えた。

「鬱であることを会社に打ち明けゆっくり休みましょう」

男は自分の頭の中で考えることができなかった。マリオネットの様に頷くことが一番楽だった。翌日になると昨日の自分に腹が立った。「会社に医師の診断書を病院から送付してもらったほうがいいですよ」

男は黙ってそれに従った。翌日になると会社に鬱をカミングアウトしてしまった自分を呪った。

「それでいいですよ。鬱は病気ではないんです。心の中のエネルギーが枯れてしまうだけなんです。ここでゆっくりと休んで薬を飲んで、規則正しい生活を送っていればきっと大丈夫。直ぐに良くなりますよ。」

抗鬱剤に睡眠薬を処方されていた。朝起きると、薬を飲んでいる自分が嫌になった。

「まじめすぎる人が鬱になるんです。少しぐらいいい加減なほうがいいんですよ」

自分がまじめなのかについて一日悩んだ。そんなことで悩んでいる自分がおかしくなった様で悩んで、答えが出ないことにまた悩んで、何に悩んでいたのか分からなくなって悩んだ。

その翌日、郵送で病室に封書が届いた。

「やはり俺がいないと仕事が円滑に回らないのだろう」

久しぶりに見る青い文字で社名の印刷された封書に仕事人としてのプライドが甦ってきた。鬱を会社に告白したことも良い結果の繋がったようだ。やはり俺は必要とされる人材なのだ。

男は鉄を封書に入れる間、やる気と充実感を感じていた。長いこと忘れていたそれは、身体を駆け巡り戦闘態勢をつくった。

「坂崎健一、右の者を業務課、倉庫物流を命ずる」

ぺろりとした紙切れが手の平で揺れていた。正常な理解力を示す頭と、意味を形作ることの出来ない頭が、せめぎあうように頭の中でぶつかり合った。そのたびに指先でつまみあげた紙切れが揺れた。

ネクタイを締めいつでも出社できるように喜び勇んで体制を整えた肉体。精神病を患えば、負担の少ない部署に移動するのは当たり前だ。ぬか喜びをした身体をバカにする精神。

「何かの間違いだらう」

裏返してもつるりとした紙には何も記されていない。何度覗き込んでも坂崎健一という名前が変わることも無かい。「当然だろ」どこからか冷めたい塊りが浮き上がってくる。

業務課倉庫係とは人員を整理する為にわざわざ作られ部署であり「依願退職」一身上の都合という会社に具合の良い言葉を得るための部署であった。

浮き上がった塊が、逆に坂崎を引きすり落ちていく。目を閉じると意識が遠退いていく。

第2話（前書き）

確固たるストーリーは何も決まっていません。この先どんな展開になっっていくかは作者自身分かりません。第一話を能天気な感じにしたのでちょっとダークな感じでせめてみました。
よろしければお付き合いです。

第2話

会社からの辞令は予想を裏切る辛いものだった。

倉庫、物流係とはアルバイトが数人いる社員整理用のポジションだ。物流係にも管理職は存在するが、ご丁寧なことに物流係課員とある。男の辞令は課長のポストを剥奪されたことを意味した。

「花の営業課、最年少課長」

神がかり的に不可能とされた案件を解決し、グラフの中で自分の数字が跳ね上がる。精力的に動き回り、羨望の眼差しに酔いしれる自分の姿。
が。

砕けていった。

パズルをひっくり返したように粉々になって時分の立ち位置が見えなくなった。どこまでも続く奈落の底に落ちていくようだった。そこは何の足がかりも無く、希望とか夢とか耳心地の良い言葉を自身にかけてやることすら出来なかった。

もう俺にデスクは片づけられてしまったのか？それとも別の誰かが。もう誰も俺を見ようとはしないのか？

ただ古井戸のなかを滑走するように人間の底に向って自分の内側に向って堕ちていくようだった。ずり落ちていく自分の姿。

ネクタイ姿の自分の姿。入社式、希望に満ち受けた社員教育、がむしやらに働いていつの間にか教育を施す側になった。

男はベットのの上にいた。ベットの上で缺を持ち会社から届いた辞令を握り締めていた。瞬きをするたびに、つるりとした用紙が揺れた。

男はベットの上にはいなかった。そこに肉体は存在しても心はそこに居なかった。

今、暗闇を滑り落ちていた。

それを自分自身で確認して、それを止める手筈が無かった。墮ち

ていく。病に負けていく。落ちた先に光が無いことが分かった。墮ちながら自分が必要とされていないことも分かってきた。

「もういい。出て行きたまえ」

威厳に満ちてそう言った本部長の顔が浮かんだ。

存在理由。そんな言葉が頭の中を踊った。

男は病室のベットの上でシーツをきつく握り締めていた。精神が肉体から分離することに最後の抵抗を試みていた。それは細胞レベルの本能的な抵抗だった

本能は肉体と精神をつなぎ止め、動物として生きるための最後の砦として暴走する男の神経をなだめに掛かった。

本能はささやかな力しか持たなかった。

本能は暴走する神経を制止することに失敗した。

本能は自分の無力さを自覚した。

自覚した瞬間に男は狂った。

「俺はここに居る。営業一課課長はここだ。」

男は叫んでベットから起き上がった。不思議なくらいに身体の中は落ち着いていた。自分にはどんな事も出来ると認識できた。あらゆるアイデアが浮かび上がり、その全てのアイデアが贅美に値する素晴らしい物だった。

俺にはなんだって出来た。それはこれからだって変わることは無い。

「俺から力を奪おうとする者達、俺を躓かせようとする者達よ。何も変わりはない。俺はいつもここに居る。俺は完全なのだ。営業一課課長なのだ」

まずやらなくてはならないのは医師を殺害することだ。

「鬱病」

その誤診で自分を病人に陥れた医者殺さなくてはならない。

医者殺さなくてはならない。

医者殺せば俺は助かる。

俺を無視した女子社員を振り向かせなくてはいけない。

医者殺せば会社は人事を撤回する。

医者を殺せば医者の間違いが判明する。

医者を殺せばすべて元に戻る。

「医者を殺せば……。医者を殺せば……。医者を殺せば……。俺は元に戻る。」

完全な肉体。完全な精神。完全な社会性。完全なステータス。全て欠くことのできない私の財産だ。それを取り戻さねばならない。俺を監視した部下を静粛しなくてはならない。

男は立ち上がりベットを下りた。ナースステーションを覗く。医者はいない。数人の看護婦が仕事をしている。

目の合った看護婦が笑顔を見せて近づいてくる。

俺には全てを取り返す権利がある。

その笑顔には明らかな侮辱が宿っていた。

看護婦は男を見下していた。

俺は完全でなくてはならないのだ。

看護婦は男を馬鹿にしていた。

バラバラになってしまった俺を取り戻すためにやらなければならぬこと。

看護婦は医者の仲間だった。

俺は今光に包まれている。

看護婦は男を貶めた張本人だった。

「許すべからず」

男ははつきりと声を聞いた。その声の主は神だった。

看護婦の笑顔に歯を見せて笑った。

「どうなさいました？」

看護婦は悪魔の顔を笑顔で覆い卑劣さを包み隠した。

「悪魔め」

男は聞き取れない声で看護婦をののしった。ナースステーション横には鉄製の扉がある。騒ぎを起こせば直ぐにそれが閉まる。

鉄製の扉を閉めるボタンはいつだって看護婦が握り締めている。

時々その扉を閉めては患者の心を悪くするための薬品を散布する。

彼女たちの気が狂わないのは高性能のマスクをしているからだ。患者にはマスクは与えられない。

誰彼かまわずに猛毒は病棟の中を巡回する。

人間を狂わすために。

狂わせた方がやつらは得なのだ。狂わせれば主従の関係を決めやすい。狂わせれば何をしたらって訴えられることは無い。

「患者様には大変残念な結果になってしまいました」
涙混じりに鼻歌を歌う様なものだ。

「毒をまいたのはお前だ」

看護師は俺を見つめ子供をあやすような顔をしていた。その表情に斜が掛かるように深い皺がよった。

悪魔が本性を表したのだ。

俺は力を込めた腕を緩めなかった。さらに体重をかけて看護師に抱きついた。ぬるりとした生暖かい液体が手の平にしたった。

「ぎゃ、ぎゃ、ぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃがががああああ」

言葉にならない悲鳴をはしたのは俺の精神だった。

血、血、血、血、血、血だ。

手を離すと看護師が送られて叫び声を上げた。看護師の太ももには、
鋭の刃が深く突き刺さっている。

「痛い。痛い。」

看護師は床をはいつくばった。ナースステーションに居た看護師達が遠巻きに見つめている。誰も駆け寄っては来ない。その顔ぶれを順番に確認していく。どうやら医者はいないようだ。

「お前達も仲間か？」

看護師の顔がいつせいに横に振られた。どの顔にも緊張でこわばり視線が固まっていた。

「そつだ。もつと俺を良く見るんだ俺はここに居る。課長様はここに居るんだ。」

次の瞬間、ガチャンという大きな金属音が鳴りモーターが回りだし
た。患者を隔離するための金属扉が閉まり始めたのだ。

「誰だ。扉を閉めたのは」

男は思わず叫んだ。隔離用扉のボタンは遠隔装置になっており全ての看護師が携帯していた。

全ての看護師を殺さなくてはならないのにその予定が今まさに崩されようとしていた。

「俺の計画は完全だった。お前達が俺の計画を台無しにした」

男の足元に転がる鋏の刺さった看護師を力任せに蹴った。

「ぎゃっ」

つとゆう悲鳴に幼いころに潰した蛙の断末魔の叫びを思い出した。

扉は三分の一ほど閉まっている。仕方が無く男は扉に向って駆け出した。駆けて行き扉をくぐってから立ち止まり考えた。

扉の向こう側。看護師の居る方。そして、扉のこちら側。臭いベツトの並ぶ患者側。

男は腹を抱えて笑い出した。

そして足を引きずり後ずさった。背中に痛いほどの視線が感じられる。

男の目の前を扉が滑り錠のかかる金属音が響いた。

扉の向こう側で患者達が騒ぎ始めた。

扉が閉まった。それは精神に異常をきたした者たちにはとてつもなく重い。

泣き叫ぶもの。走り出して扉にすがりつくもの。壁に向って自分の頭を叩きつけるもの。ウィルスが蔓延していくように異常行動が広がっていった。

扉の向こう側。盛りをついた動物のように、寄生を発する異常者の世界。

そして。

扉のこちら側。

こちらにも異常。異常なまでに静まり返っている。男は背中では看護師の動きを感じていた。誰一人動けない。誰一人として俺には逆らえない。

ゆっくりと振り返った。まるで第三の瞳が開眼したように世界がはつきりと感じられた。

男が足を踏み出すと一人の看護師が振るえ、回診用のトレイを落とした。

それが合図となって看護師の呪縛が離れ我先に看護師が逃げ始めた。

「待ちやがれ」

その背中を男が追った。

階段に逃げた看護師は逃げ切った。エレベーターに向った若い看護師はパニック状態で呼び出しボタンを押し続けていた。

その看護師の髪の毛に男の指先が触れた。そして、驚& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; ;みにして引き倒した。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

涙ながらに看護師は同じ言葉を連呼した。鼻水を流し、涎を垂れ流しにしたその姿は男の欲情をひどく刺激した。

看護師の胸元に手をやりナース服を引き破る。

内に隠されていた女の芳香がほとばしるようにあたり一面に充満した。

「ぐおおおおおおお」

男は頭を振り乱し女の香りをかいだ。看護師の悲鳴は男の前で何の役にも立たなかった。

第三話

そのときだった。

けたたましいサイレンが病棟に鳴り響いた。階下に逃げた看護師が緊急事態を知らせたに違いなかった。男は引き裂いたナース服をさらに引つ張った。女の性が臭いとなって散漫する。薄いピンク色のナース服の内側にはたわわな乳房がブラジャーに隠されていた。男はそれを剥ぎ取りたい衝動に駆られた。布きれのようなブラジャーをむしり取りその下には色づいた乳首が。そして、その更なる奥には白く濁った脂肪と燃えるような紅い血流が隠されている。それをナイフでえぐりだす。

「たどり着きたいその秘部まで」

空気を震わす非常サイレン音と、目の前の肉体に頭の内から痺れが走り男は吼えた。

「そこまでだ。動くんじゃない」

現れたのは警棒を持った警備員だった。

「この精神異常者め」

警備員はナースステーションを一瞥し男の足元で震える看護師を認めると吐き捨てるようにそう言った。

警備員はすぐさま警棒で威嚇しながらにじり寄ってきた。無線で応援を依頼する。カウンターの影でうずくまる看護師が警備員の目に入った。太ももには深々とした傷口が広がっている。生きているのか死んでいるのか警備員には判断がつかなかった。看護師はぴくりとも動かなかった。ただ傷口からは鮮血が溢れている。

「なんて事を」

警備員の目に更なる警戒心と正義感が宿っていく。

男は食べ損なつた女の肉体につばを吐きかけた。それは音を立てて胸元の柔らかかなふくらみに堕ちて広がった。

女に印をつけたのだ。お前は俺のもの。

そして男は警備員に見えるように両手を上げた。降伏のしるしだ。

「よしそうだ。いい子にしてるよ。動くんじゃないぞ。」
警備員は演技がかった台詞を吐いた。ハリウッド映画のヒロインのように警備員の目は目の前の手柄に酔いしれているようだ。まさに正義は自分の内に在り、悪を懲らしめる無敵のヒーローになりきっている。

「応援を待ったほうがいい」

男は声にはしなかった。警備員との距離を測る。階段はだめだ。応援部隊がやってくる。エレベーターは？止められたらお終いだ。病室側は鉄の扉に行く手を挟まれている。

警備員との距離が縮まった。

万事休す。まさに四方を塞がれている。

男はヒーローになりきれない警備員に笑ってやった。

さらに距離が縮まり数歩のところまで近づいてきた。

『いまだ』

男は警備員と反対側に走り出した。

『愚かな警備員よ。自分の愚かさを呪え。』

警備員との間が病棟の柱で遮られる。男からも警備員からもお互いの姿が一瞬確認できなくなる。あわてて警備員は男の走り出したほうに向って追いかける。それは条件反射のようなものだった。

男は逃げた。追わなくては。全力で筋肉が動き出す。自分が追い詰める狩人だと信じて、獲物は逃げるものだと信じている。正義はまさに自分の手の中にあり、その手を伸ばせばヒーローの称号を掴み取ることができる。

そこに男が待ち構えているとも知らずに。

走り出した警備員は不意に目の前で男の顔を見た。その顔が笑っているのを識別した。警棒を振り上げるより早くナイフが叩きつけるように飛んできた。男は柱の影でナイフを振りかぶって待ち構えていたのだ。

「うわあ、ぎゅうううううえ」

警備員は驚きの叫び声と断末魔の悲鳴とを同時に発した。ナイフは警備員の目玉を直撃した。ピンポン玉のような眼球が飛び出し床に転がった。それには肉片と白い糸状のものがこびりついている。目玉は転がり男を見つめる様な形で停止した。

「汚らわしい」

男は取るに足りなかつた愚かなヒーローを見下ろし悠々とエレベータホールに向つた。そして、思い出したかのように振り返りナーズステーションに設置された蛇口で顔を洗い、返り血のついた上着を脱ぎ捨てた。壁に掛かつた医師用の白衣をとり、置いてあつた眼鏡をかけた。

『チン』という小さな音がエレベーターの到着を知らせた。エレベータに乗り込み振り返ると病室側を仕切る鉄製の扉の間から無数の患者の瞳がこちらを覗き込んでいた。無数の異常者の瞳。

「グッバイ」

男は片手を上げてその瞳に答えた。エレベータの扉がゆっくりと閉まり男を階下に運んだ。応援の警備員が惨劇の現場に到着したのはそれから5分後のことだつた。警察に通報するまでに、さらに5分を要した。男は医師に成りすまし返り血の有無を確認してから悠々と病院を後にした。

第三話（後書き）

お付き合いいただきありがとうございます。さて読んでいただいて恐縮ではございますが、未だ持って、この話のストーリーが決まりません。この先どんな展開になっていくのか私が一番わくわくしています（笑）

よろしければ今後もお付き合い下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6825h/>

表の裏は裏の表

2010年10月21日21時03分発行